

77

## 群馬県における明治前期のコレラ流行と対応

誌上発表

—群馬県医学校山崎泰輔校長の日記から—

須長 泰一

伊勢崎市

群馬県医学校の第二代校長を務めた山崎泰輔は、明治10年4月19日から明治27年10月15日までの日記を残したことが知られている。日記は内務省御用掛として鹿児島県臨時病院副院長に任命された日の記述から始まり、鹿児島・桜島・延岡で携わった西南戦争の戦傷者への治療や群馬県医学校長就任後に生活拠点となった前橋町での医学教育や医療活動の内容を含む多様な出来事が記録されている。この時代は地方社会において近代的な医療の確立が目指されていた時期にあたり、「山崎泰輔日記」は群馬県における実態を追求する上で、極めて重要な史料と考えられる。

山崎泰輔は、天保11年に遠江国豊田郡中部村溝口小平次の次男として生まれた。親戚にあたる気田村の医師山崎讓策の養嗣子になり、坪井信道門下である駿府の蘭方医村松良肅から医学を学んだ後、養父の医業を継いだ。明治3年に上京し、大学東校でドイツ人教師に医学を学び、同9年、東京医学校（大学東校が名称変更した後継校）を卒業した第一期生にあたる。卒業後は同校監事、同校病院医員を経て、同10年、西南戦争に際し、内務省御用掛として鹿児島県に派遣され、同県臨時病院副院長、院長を務めた。同12年3月、鹿児島での任務を終えて帰京し、内務省を辞職した。同年6月、群馬県医学校長大久保適齋の後任に迎えられ、同校付属病院長も兼務した。同13年、新設された群馬県衛生課の課長を短期間兼務した。同14年7月、群馬県医学校の廃止に伴い、群馬県立病院長に就任した。同17年、同病院の廃止後には、私立前橋病院を設立し、院長を務めた。また、群馬県地方衛生会委員や群馬県開業医師組合本部長などの要職も歴任した。同27年、病気のため、病院を閉め、東京本郷に転居し、同31年、58歳で死去した。

「山崎泰輔日記」では、明治期に頻発したコレラ流行に関する記述を認めることができる。その初出は西南戦争に際して鹿児島県臨時病院副院長を務めた時期で、明治10年10月24日、延岡を職務で訪れていた大分県吏員の発症が記録されている。群馬県でのコレラ流行については、群馬県医学校へ赴任直後の明治12年7月5日、藤岡町でのコレラ患者発生を始めにして、8月8日に太田町、14日に川俣村、21日に岩鼻町での発生が記録されており、県内各地へ拡散していった様子を読み取ることができる。そして10月1日、漆原村での発生を最後に、この年のコレラ流行は終息したことが記されている。こうした事態に対して、山崎泰輔は7月5日から交通の要衝である高崎町での旅客検疫を開始し、避病院予定地を選定した。そしてコレラが発生した地域へ群馬県医学校付属病院の医員である渡辺節、宮寺弥綸、山田精一と薬剤生の山岸安太郎らを派遣した。8月15日、流行の拡大に伴い、私立群馬病院の医員である服部立海と高橋周禎を衛生掛に雇入れ、県内各地へ派遣する検疫医の増員を行った。また、8月20日にはコレラの予防法をまとめた「虎列刺予防諭告」を布告し、住民への周知を図ったことが記録されている。明治15年の流行では5月に富岡町で発生したコレラが7月には県内全域へ及んだ。コレラの防疫は県衛生課により主導されたが、群馬県立病院長である山崎泰輔は検疫委員に選任され、その指導的な役割を担った。7月21日以降、蔓延が著しい西群馬郡、山田郡、碓氷郡を衛生課長と視察するとともに各地の避病院や監獄を巡視し、防疫上の観点から、指導助言を行ったことが記載されている。

内務省『衛生局報告』によると、群馬県のコレラ患者数は明治12年が165人、うち死亡者104人、明治15年が3,112人、うち死亡者1,833人と報告されている。明治12年と明治15年では患者数の点で規模の違いは明らかであり、また、流行の拡散する様子も相違していることから、「山崎泰輔日記」は群馬県における明治前期のコレラ流行のプロセスを検証する上で大きな意味を持つと考えられる。